

# マツゲン箕島 頂点に歓喜

## 全日本クラブ野球決勝 OBCを完封

第44回全日本クラブ野球選手権大会（日本野球連盟、毎日新聞社主催）の準決勝と決勝が29日、埼玉県所沢市のメットライフドームであった。西近畿地区代表のマツゲン箕島硬式野球部は28日の準決勝で関東地区代表の横浜金港クラブ（神奈川県）に5-1で快勝。決勝では九州地区代表のビッグ開発ベースボールクラブ（沖縄）を6-2で破り、決勝で東近畿地区代表のOBC高島（滋賀）に7-0で勝利した。マツゲンは、2年ぶり5回目の優勝。10月から大阪市の京セラドーム大阪である、第45回社会人野球日本選手権大会の出場権を得た。

OBC高島

00000000  
20201027

マツゲン箕島硬式野球部

（七回コールド）

マツゲン箕島は順当に勝ち上がり、決勝は準決勝が終わった約40分後に始まった。初回、四球などでチャンスを広げ、5番の渡部純史選手（20）が打球をしっかりとミートして左中間に適時三塁打を打ち、2点を先制した。幸先の良い得点にスタンドからは拍手と声援が上がった。準決勝でようやく安打が出た渡部選手だったが、「とにかく後ろにつなぐことを意識して打席に立った。うれし」と胸をなで下ろした。

三回も主軸の夏見宏季選手（25）が「ホームランを狙って振った」という適時三塁打などで2点を追加。その後も着実に3点を追加して、七回コールドと相

こどもの歯ならびのご相談は  
**青木歯科医院**  
院長 青木 隆典  
0120-11-55-99  
岩出市吉田257-1（Pあり）  
aokishika-wakayama.jp



優勝を喜ぶマツゲン箕島硬式野球部の選手たち  
＝いずれも埼玉県所沢市のメットライフドームで

三回も主軸の夏見宏季選手（25）が「ホームランを狙って振った」という適時三塁打など

手を圧倒した。守備も堅実で失策はわずかに一つ。7奪三振で完封した和田拓也投手（25）は「今日は楽しんで、魂を乗せた投球ができた」と笑顔で話した。和田投手の母ゆかりさん（55）は「けがをして大会に間に合わないのではと思ったが、本人が楽しんでくれていて良かった」と試合を見守った。

大会の表彰式では夏見選手が14打数9安打の打率6割超えて首位打者賞を、和田投手が最高殊勲選手賞を受賞した。地元高生もエール

○：決勝戦のスタンドには埼玉県立豊岡高校の野球部23人も応援に駆けつけ、元気に声援を送った。写真。マツゲンが27、28日に高校のグラウンドを借り

- ▽準決勝（28日）  
マツゲン箕島硬式野球部  
11220000206  
00002000026  
ビッグ開発  
ベースボールクラブ  
（マ）松尾、梅原、中原、水田（ヒ）小浜、宮城、天久、照屋▽三塁打 黒岩（マ）▽二塁打 黒岩、山口、岸、池島（マ）、黒島（ヒ）  
▽準々決勝（28日）  
マツゲン箕島硬式野球部  
10000301005  
00000100001  
横浜金港クラブ  
（マ）和田、梅原、水田（横）  
秋田、田辺▽高橋▽二塁打 黒岩、小野（マ）小原（横）



では調子が良かった夏見、黒岩、池島がきちんと結果を出してくれた。盗塁を仕掛けるなど足を使った攻撃もうまくいった。日本選手権に向けて、この調子の良さを維持していきたい。

たことが縁となった。球拾いなどを手伝ったという主将で2年の村山大樹さん（16）は「特に夏見選手や岸選手は打撃のレベルが違っていた」と話した。「二塁手で2年の岩淵郁太（あやたさん）（16）は「守備での球の見極めが参考になった」と述べ、交流を持ったマツゲンの選手たちの勝利を願った。

## 「日本一」へ 配球の幅広げ



入部3年で芽が出なければ引退しよう決めていた。3年目だった昨シーズン、レギュラーを取ることができず、「た」と評価されるまでになっ

### 熱の球

中原 良照 捕手（26）

引退を決めた。西川忠宏監督やコーチ、選手らに伝えると「後悔しないか」「本当にいいのか」と声を掛けられた。同期の和田拓也投手（25）は「来年、2人でめっちゃくちゃ強いチームにしよう」と言ってくれた。「自分を必要としても活躍できるように見直していく」と次を見据えた。

29日は準決勝で先発のマスクをかぶり、決勝進出に貢献。決勝では出番がなかったが「優勝が決まった瞬間、すごくうれしかった。日本選手権では、打者としても活躍できるように見直していく」と次を見据えた。